

# 方言助詞集 (格助詞・接統助詞・副助詞篇)

—近畿・(中国)・四国—

鎌田良二 (編)

## はじめに

文末助詞が方言研究の上に大きな意味をもっていることは衆知のことであるが、他の助詞も方言表現上微妙な働きをしているものがある。

ここに、全国の方言助詞の姿を一覧できるものがほしいと思い最近に出された書から集めてみようと思いたった。

『全国方言辞典』にも「小詞」の項があるが、最近の書には各地のようすがかなり詳しく報告されているのでこれから集めてみることにした。

今回は、まず、近畿、中国、四国からはじめようと思ったが、中国地方は方言研究物が非常に多く、特に助詞に関するものが多く

て、これをまとめるには、かなりの時間を要することがわかった。ここにはごく一部しか出せなかったことをこわっておく。

ただ、『方言学講座』の中国地方の部には助詞の記述が少なかった。

近畿、四国についても追々、補ってゆきたいと思う。石川・富山・福井をここに入れる。

この度の資料とした書とその略号を記す。

『方言学講座』(東京堂)——略号(コ)

『近畿方言の総合的研究』(榎垣実綱・三省堂)——(ソ)

『京言葉』(榎垣実著・高桐書院)——(キ)

『大阪弁の研究』(前田勇・朝日新聞社)——(オ)

『土佐言葉』(土居重俊・高知市立市民図書館)——(ト)

これ以外の方言の書も参考にしたが、語彙集には助詞の記述が少

なく、また、右の書と重複するものが多いので今回は省いた。

以下、方言形は片仮名で記した。見出しの(ハ)は標準語形で示した。

資料の原文を、全体的に調えるために記し方を変えたものも多いことをことわっておく。

## 格助詞

一般に、格助詞・副助詞は省略、融合が多い。各地の変化形も音韻変化によることが多い。

用法に微妙な差があることがある。

〔が〕——を

京都・格助詞の省略が著しいが、「日が照ル」など、無生物主語の場合は省かれない。(コ)

京都・特に無生物主語の時は省きにくい、ヒイモエテル(火が燃えている)の場合は、母音の長音化が不自然さを救っている。アカイノスキヤ(赤いのが好きだ)の場合も、助詞ガの代りにンを採用

して、アカイノスキヤとなるのが普通である。(ソ)

大阪・つけないでも主語になることが自明なる時は、省略するのが普通である。(ハ)形容詞が述語となっている場合、(ハ)代名詞につく場合、(ハ)形容名詞「こと」につく場合の省略が目立つ。(オ)

三重・「が・を・と」は使わないことが多い、これを省略とみる人もあるが、「表現しない」とか「零記号表現」とも考えられる。この現象は一音節名詞が長呼されることと密接な関係があるようだ。(ソ)

三重・南牟婁郡で、ウミヤ・ウンミヤ(海)・カサー(倉)・オタ(音也)・クツツア(靴)の融合形で現われ、志摩・南伊勢では「学校が」ガツカとなる。(コ)(ソ)

和歌山・主格を示す格助詞が省略されることは近畿一般の特徴であるが、ここへんが入る土地が中部及び南部の山間地にある、話しことでは始終出てくるだけに耳をひく語形である。モーハルンスンデシモータ(春が)、アメン少ナイ(雨が)、一音節名詞でも、チンデタ(血が)となる。

和歌山・新宮市では、ウミヤ・カサヤ・オトヤのように「ヤ」として現われ、或いはウミとのみ言つて助詞をつけない場合も三重・奈良・和歌山三県共通している。(コ)

三重・南牟婁の一部では(和歌山県)新宮あたりと同じように

「海ヤ」「傘ヤ」のように「が」「は」の両方に対する「ヤ」という助詞を持つている土地もある。志摩の先島地区で、「木<sup>ニ</sup>」「門<sup>ニ</sup>」の時には、「hoa」[moa]となることだ、これはホンア・モンアで、ンとアとが融合して[a]が鼻母音となったものだと考えられる。だから、この音をホアン・モアンと表記すると誤解のもとになる。東北地方にもこの現象はあるらしい。大王町波切で「新聞・黒板・当番・松・天」などの語の場合は鼻母音とならず、「<sup>ニ</sup>」に近い音である。(ソ)

兵庫・表現されないことが多いが、淡路では名詞と融合した形で使われる。「竹が」はタキヤとなるが、そのため、「竹は」との区別がなくなり「流が」「流は」もタキヤとなるわけで、この四つの表現の区別がなくなる。「タカ」は「鷹が・鷹は・宅が・宅は・蛸が・蛸は」の六種を区別なく表わし得る。(ソ)

香川 徳島 *Konokaki-innai*・*Sake-nomijaka?*・*uta-urite-kure* のように省略されることが多い。(コ)

愛媛・西宇和郡・東宇和郡、腹ン稲イ・犬ンホエルとンになる(今治にはない)(コ)

高知・「——が好きだ」のときの「が」を「ニ」という。ウドンニスキ(うどんが好きだ)土佐村旧地蔵村、サケニスカン(酒が好きでない)大豊村旧豊永村、アノヒトニコワイ(あの人がかわい)

同「リンゴ〇好きだ」の〇のところに「ニ」を用いるのが土佐郡、「ン」が婦多郡、他の全県は「ガ」を用いる。(ト)

〔を〕

大阪・とかく使わずに済まず、本見イ。使うと強い表現になる。本才見エ本才。(コ)

大阪・殆どの場合表面に出てこない。フデ〇モツテ、ジト〇ガク(筆を持って字を書く)目的、ヤマ〇コエル(山を越える)場所、イエアル(家を出る)起点。(ソ)

大阪・主語と他動詞とが相接する時は必ずといってよい程これを省略する。(オ)

三重・大王町波切で、「本を」「門を」の場合には(オ)とはならない。「を」の場合は融合が起らず、たいてい「を」を表現しない。(ソ)

三重・波切付近で、ウタオチウトタ(歌を歌った)、イシヨチホソナ(石を放るな)のような「ヲチ」「ヨチ」という格助動詞のようなものがある。「ヨチ」は「ヲチ」がイ韻の名詞に続く時の変化か、現在ではどの名詞にも続くので「ヲチ」「ヨチ」の二形が無差別に使われている。(ソ)

福井・使わないのはこの地域全体に通じている。「雨が」はアミ

ヤアとなるのも全地域でみられる。(ソ)

滋賀・湖東から湖北にかけては「*kaio*」である。(ソ)

奈良・「コラ、ワレ」は「ナニ」を「シテンノド」と「ユータ

ンネタラ」「アホ」を「ヌカセ」「チュオッタ、ワレ」(北部)「コラ、

お前は何をしていいのか」と言つて尋ねたら「バカを言え」と言い

おつたよ)においてカッコに入れた助詞は普通表現しない。ところが

が南部になると「が」は省くことはあつても「を」は表現される事

が多いようである。例えば、「アメ(が)フリョール」に対して、

オチャオノミター(お茶を飲みたい)天川村洞川、サキョーノータ

(酒を飲んだ) 十津川村、フトンノシク(ふとんを敷く) 下北山

村、のように明らかに「を」の表現がある。(ソ)

兵庫・但馬では名詞と融合して現われて、カサア(傘を)、トリ

ヨオ・トリユウ(鳥を)、ニモツオオ・ニモツウ(荷物を)、サキョ

オ(酒を)、ミンオ(味噌を)のように、*o.v.a.s.i.jo.v.o.i.i.e.i.ovo*

*o.i.eo.jo.i.*となる。(ソ)

(の)

大阪・ノ・ノン・ンとなる。「某の所」ボクトコ、奥サントコ。準

体、サワツタ(ノ)ン誰ヤ。「のもの」アンタノン頂戴、「の(か)」

要ルノン(カ)。(コ)

大阪・ノが体言の代りに用いられる場合はノンとなる。コラダレ

ノンヤ(これは誰のものか)、イカハルノンデッカ(いらっしやる

のですか)。(ソ)

福井・準体助詞、学校ノヤ、一般に全地域にみられるが、ノヤ

とノをひく形が名田庄村、納田終などにある。また、ンヤ、ンジャ

とンとなる形も各地域に散見する。(ソ)

滋賀・犬上郡保月には。所有格にガ・ガノをつかう。アが家(私

の家)、オ爺がノ杖(お爺さんの杖)。(ソ)

兵庫・但馬ではボツカンダ・ウラガンダ(私のだ)のようにカン

となる。おそらくカノから転じたものだろう。南部ではワシノン・

ワシン(わたしの)のようにノン・ンともなる。淡路では、池ノム

コナ家(池の向こうの家)のようにナとなる。ソコニアルナア(そ

こにあるのは)ともなる。(ソ)

高知・体言の働きをするノ(準体助詞)に相当するものにガがあ

る。アタラシーガガエロー(新しいのがよいでしょう)、コリヤ

オマンガヨヨ(これはあなたのですよ)。(ト)

高知・高知市でも「俺のところ(家)」をオレンクと言ひ、ノが

[O]を落してンとなることがあるが、幡多郡ではノ↓ンの傾向が強

い。イエンナカエハイラレン(家の中に入つてはいけない)、カワ

ンナカエ落チタ(川の中へ落ちた)。(ト)

(ハ) (ヒ)

京都・方向を示す助詞を省いて、大阪イクなどと表現するのも、かなりよく認められる所であるが、これは、その助詞エがさらにイというように発音されることと関係があるろう。二音節以上の格助詞はだいたい省略されない。一般的には、京都市やその付近に助詞の省略が著しく丹後地方等ではあまり多くない。また、子供の言葉に助詞の省略が多いが、これは全国的な現象であろう。A京へ筑紫に坂東さVというわけで、こちらでは、格助詞イ(↑エ↑)の勢力が強い。遠足イ行ク(遠足に行く)。(ソ)

大阪・大阪エ朝肴ク。など、ニともエとも、この助詞は、音声的には、エにもイにもエイの間にも。(コ)

大阪・オースカイツイタ(大阪に着いた) 帰着点。ウミベイイエタタ(海辺に家建てた) 場所。ヒガシイタ(東へ行った) 方向。ヤットイエイツイタ(やっと家へ着いた) 帰着点。帰着点の場合「に」でも「へ」でもイになる。(ソ)

大阪・形容詞連用形に添える。遅オニ帰ル。商人の名に付けて、ネクタイ和田ニ買オタレ(和田A洋品店Vで買ってやれ)。(コ)

大阪・「へ」で対象をあらわす場合、大阪方言ではすべてニとなる。コリアンタニアゲル(これはあなたへあげる) 対象。結果をあらわす「と」はすべてニとなる。さらにそれがンともなる。コリー

ガミズニナル(氷が水になる) 結果。コリーガミズンナル。(ソ)

三重・普通の談話ではイとなる。(ソ)

和歌山・方向、場所、川イイテコ。山イイコラ。西イ飛ンダ。

「へ」のところが「イ」になる。全県。(ソ)

兵庫・「へ」は「イ」になる。ただし、マエツメル(前へつめる)のように上位語尾音がエのときはエとなる。大阪イサンテデカケタ(大阪へ出かけた)のようになるのは強急的な感じがする。(ソ)

兵庫・「に」は、但馬では名詞と融合してオケアア・オカア(岡

に)、アスピイイク(遊びに行く)、カレエキタ(借りに来た)のようになる。南部では形容詞連用形につづけてナゴオニナル(長くなる)、ホソオニキル(細く切る)と使う、大阪風である。フネンノル(舟に乗る)のようにナ行・マ行音の前でンとなることも多い。また、オヤニカワント、ムスコニコオトル(親から買わないで、息子から買っている)のような用法もある。(ソ)

鳥取・八頭郡家町では、エ(へ)は用いず、場所・方向すべてニで示す。(コ)

鳥根・浜田市では前行母音が(e)の時は、「酒エ酔ウ」「蒸エ餌オヤル」と(e)となるが、他の場合は「い」となる。学校イ行ク、弟イヤルなど。出雲市では鳥ンナル、学者ンナル、鳥ネナル、学者ネナ

ルと〔N〕や〔e〕が共通語の〔ニ〕に対応しているが、「東京へ行く」という場合は「東京エ行く」という。しかし、〔i〕には〔e〕が対応するから、もともと石見のように〔i〕であろう。隠岐は「中く・山く」は *nake, jame* といふ。 *nakai > nake* の変化と考えられる。(n)

香川・徳島・方向をあらわす格助詞は、*jamai*—*noboru* のように〔i〕を使う。(n)

高知・地点・目標などをあらわすニまたはエに相当するものにイを使用する。清水市・大方町・旧長者村、クルマイノル(軍に乗る)、ユイミツイレル(湯に水を入れる)。(ト)

〔て〕  
兵庫・但馬で、ヤマカラ弁当食ッタ(山で弁当を食った)のカラという用法があり、山陰へ続く。(ソ)

鳥取・因幡と東伯郡では場所を表わす助詞「で」を *pa* という。「山で遊んだ・校庭カラ走ル」という。また、*pa* は東伯郡大栄町亀谷ではコッダケカラニャーケーゴシエン(これだけより無いからやらない)という表現にも用いる。(コ)

〔と〕引用

大阪・ト言ウのトは省きがち。和田ユウ人が来ルユウ事ヤ。ト思ウ・ト遊ウ(ではない)のトも省き得る。和田(ト)遊ウヤロ(ト)思ウワ。(コ)

大阪・「と言つ」のトの役を、「ユウテ」がする。「来ル」ユウテ言ウテル(来る)と言つてゐる。(n)

大阪・「言つ」「思つ」の上の「と」はぬけることが多い。ハヨ、コイ〇ユートンノニ(早く来いと言つているのに)。「と」いう「がチューともなる。ナンチューコトヌカスンヤ(何ということか)を言いやがるのだ)、「と」いうことだ」とき「と」がテになる。イヤヤチューンヤ(嫌だということだ)。(ソ)

福井・「と言つ」がチューになる。(ソ)

三重・「と」が表現されないのは、後に「いう」「おもう」が続く場合だけである。「と」に「いう」が続くとチューとなるのは全地域にみられるが、ツウとなるのは南伊勢・北牟婁である。(ソ)  
奈良・引用文を受ける「と」を表現するとすれば「チュー」のように融合形をとることが多い。

兵庫・あとに「言つ・思つ」がつづくとき現われないことが多い。播磨では、アンナンウソチガウカ(あんなの嘘と塗うか)と、チガウの前で表現されないこともある。ただし、「と」いう「がチュー・チュー」の形で現われることは多く、但馬でチュー・トユウとな

り、淡路では、ツライモンジャテワノオ(辛いものだというわね)のようにテワとなることもある。「とか」はナンタラカタラ(何とか彼とか)と使うが、淡路ではタロとなることがある。(ソ)

高知・「と言う」がつづまってツとなることがある。幡多郡や大豊村で使用される。ヒヨリツ(一)モナ、アテナラン(日和というものはあてにならない)。センセイガ、ジュエエンモツテコイツ(一ケ、クリヤ(先生が十円持って来いということだから下さい)旧十川村島)と旨う」がつづまって「チュー」となるところがある。ナンチューコトイヤ(何と言うことを言うのか)池川町・仁淀村。

(ト)  
香川・徳島・化成の結果をあらわすには格助詞「と」を使わず。

Ko:ri-ga-mizu-naruのように $\text{E}$ を使う。(コ)

(より)

富山・石川・山ヤロ(より)高イ、カッキヤロ(柿より)甘イ、内浦。(コ)

京都・シカ・ホカの形がある。近頃は京都各地で、ウチガアンタノホガエライ(私よりあなたの方がえらい)の形がかなり用いられる。これに対して、ウチガシツテヘン(私より以外は知っていない)の如き場合のシカ・ホカは府下全体に相当広く用いられ前者よ

り勢力が強い。前者が後者から発展的に生まれたものであることはいうまでもないが、後者は共通語のいわゆる係助詞シカに対応するとも考えられる。(ソ)

京都・撰択で、コッチノホオアヨイ(こっちの方が良い)のデがある。京都等の若い人に、或る程度用いられるが、実際問題としては、撰歩の意を表わすデ(共通でも用いる)との区別が難かしい。撰歩の時はアの代わりに、デモを用い得るが京都方言の撰択の場合にはデのみを用い、デモを用いない。(ソ)

大阪・ヨカは「よりほか」、ホカは「よりほか」の意か。共通語の「より(ほか)」に対応する。コレヨカエー(これより良い)比較。コースルホカシャナイ(こうするよりほか仕方がない)限定。(ソ)  
三重・「より」を比較に使う時、伊賀ではハツチャ。伊勢ではヨカ。南三重でヨリヤ、ヨリリヤとなる。(ソ)

奈良・比較の「より」は、ソレホガ(その方が)、ソレヨカ(それよりも)、ソレヨツリヤ(それよりは)。限定の「より」は、十円ニツチャ・ハカ・ハキヤ・シカ持っていない。となる。(ソ)

和歌山・比較、AよりもBの方がよい——Bシカエエ、紀北地方に多い。否定文に使われる強調のシカがその強調性を買われて発展してきたものと思われる。そして、「これがよい」という強調がおのずから他との比較の表現ともなっているのである。(ソ)

## 接 続 助 詞

兵庫・播磨で、コジキヨカマシヤ「乞食よりました」、ネロヨカシヨオガナイ(寝るより仕方がない)のようにヨカを使い、赤穂でコレシカアレガエエ(これよりあれがよい)ウチシカ背ガ高イ(私よりも)、朝シカエエ(朝よりも快方に向かつている——病状が)と「よりも」の意で、和歌山のシカが「の方が」であることに對する。(ヨ)(ソ)

高知・ヨリカ・ヨリヤ・ヨレ——比較的基準。冬ヨリカ夏ガエイ。ミカンヨリヤリンゴガンマイネヤ(蜜柑よりはりんごがうまいね)、ワレヨレズットハイイソ(お前よりずっと早いぞ) 大月町姫の井。(ト)

### 〔なり〕並列

京都・柿ナリ栗ナリ何カ食ベタイの如き、並列のナリの代りにナツト形を用いる。(ソ)

大阪・軽く大体をのべたり、並列選択をあらわしたりする、「なり」と出たものであろう。オチャナトオアガリ(お茶なりと召し上げれ) 大体。イクナト、ヤメルナト、カッテニシナハレ(行くなり、止めるなり思うようにしなさい) 並列選択。(ソ)

### 〔ば〕

京都・「長ければ」「書けば」等の「は」は殆ど使わないで「カッタラ」を使う。従って形容詞・動詞・助動詞を通じて仮定形は殆ど使わないのである。並列用法の「なければ」は「ンシ」を使う。長カッタラ切ッタラエー。字モ書カンシ、本モ読マン(字も書かなければ、本も読まない。(キ))

京都・福井・仮定順接のバは全く認められず、書イタラが代用される。(コ)

京都・書イタラ・高カッタラ。山城・丹波一般にこのタラを用い、行ケバの如きは全く使用しない。丹後では行キヤアの形が或る程度認められる。(ソ)

大阪・「ば」のままて使うことはない。音を崩してしまふか、さもなくば別個の表現を取る。即ち、動詞・形容詞・助動詞の已然形(仮定形)に「ば」をつけると、悉くア列拗音となる。中には更に直音化するものさえある。咄ニ詰リヤ子供オ使エ(落語・いかけ屋)これは前代の名残である。今日では助動詞「タラ」「タ」の仮定形)を用いて表わすのが普通である。降レバV降リヤ……雨ノ十日モ降ッタラエエノニ。但し、「ねば」の「な」のみはそのままで



が、下に「ならん」が来ると「ん」となる。(オ)

大阪・条件法においてバを用いることは殆どない。和泉から河内にかけて、イキヤ・ミリヤ・ハケリヤ等拗音化した形においてその痕跡を止めているに過ぎない。普通には、タラとタの仮定形を借用する。(ソ)

大阪・仮想。アノアトノ電車ニ乗ツテタクライナラ今頃名変ツタルデ(乗つてもいようものなら今頃戒名ものだけ)。(コ)

奈良・北部では「降ツタラ」の代用形を使うため余り遭遇することがない。但し、古老の間ではフツリヤの融合形を使うことがある。南部ではフリヤの融合形の方を繁く用いる。(ソ)

兵庫・「ば」は使わず、アメフリヤ(雨が降れば)、フツタラ・フルトと使う。タラは淡路ではタアともなる。(ソ)

(ト)

奈良・既定条件の「ト」は、南北とも「ト」である。(ソ)

滋賀・ト(イウト)の意で、トサイガを湖東・湖北で中年以上が用いる。活用語の終止形接続。ソウスルトサイガ、マタアカンナ。オマエ(ガ)来テクレルトサイガ千人力ヤ。(ソ)

高知・「すると、いきなり」の意で、ノーカーラを用いる。モドリノーカーラ、オコラレタ(帰って来るといきなり怒られた)。(コ)

(デモ)

石川・行ツタテテ(行つても)能登。(コ)

福井・テモ・デモは全地域に見られる。タツテー大体、東部(敦賀市を中心として)、カッチー大体、西部(大飯町・名田庄村)、上中町や三方町にも若干散見するから、もともとカッチテの方が全地域におよんでいたものといえるかもしれない。(ソ)

京都・福井・シカラレタカマヘン。シカラレタテという新しい形もある。東京のシカラレタツテはない。(コ)

京都・叱ラレタカテカマヘン。係助詞デモに対して京都ではカテが使用されるが、接続助詞のカテと係助詞カテとは、その使用範圍が全く同じである。京都市及びその付近では、叱ラレタテカマヘンの形もかなり認められる。女性語的な性格をもっているが、年令層は必ずしもはっきりしない。叱ラレタカテの約まったものか、それとも文語の叱ラレタトテに連なるものであろうか、この叱ラレタテは、東京語のように、叱ラレタツテとなることはない。(ソ)

大阪・オヤジニ頼ンダカテアカン、オヤジニ頼ムカテ出来ルカ、ドオカ分レヘン。前者(シタカテ)よりも後者(スルカテ)の方が「もし、仮にするとしても」の感じ。(コ)

大阪・逆接条件法にはテモも使うが、より多くタテ(ダテ)を使う。これは、タトテ→タツテ→タテと変化したものであろう。三

重県ではタトテ、タツテのようであるが、大阪府ではもっぱらタテである。ナンボユータテ、アツカイ（いくら言ってもあくものか〔だめだ〕確定条件。ヨシダテ、コンヤロ（呼んでも来ないだろう）仮定条件。さらにカラトテ→カテが、タテ（ダテ）と同じ機能に用いる。（ソ）

大阪・反戻、見タ（ツ）テ分ラン。（コ）

三重・「ても」を逆の仮定に使う時、ソナコト、ユウタツテ（そんなこと言っても）尾鷲市、となり、木之本ではユウタテとなる。津ではユウタトテである。「でも」を逆の既定に使う時、セシヤテ、シルカレ（先生でも知るものか）波切。南伊勢でヤテ・ヤツテとなる。牟婁でジャツテとなる。北三重はカテ。（ソ）

奈良・北部では「ても」を逆接の仮定に使う時、ソナイ言ータテ。ユータカテの形を使う。（ソ）

滋賀・カテを使う。ソナコト言ワンカテエヤロ。（ソ）

兵庫・テモ・タテ・カトテ・トナなどがある。但馬では、書イテモシヨオナイ（書いても仕様がな）、見タテ、米タカテと使い、播州ではそのほかに、ミタ（カ）トテがある。（ソ）

高知・タチとなる。シタカチイカン、ユイチャウニ（しても駄目だと言っているのに）（コ）

高知・「として」の意で、オマンガ ナンボトローチ、ソリヤ

（一）イカンゼヨ（あなたが、いくら取ろうとしても、それは駄目ですよ）（コ）——高知では、「e」が「i」になり、「て」が「ち」になっているのだろう。

〔けれど（けれども）〕〔が〕

富山・石川・アーキヤケツト（赤いが）白峰。アカイケド（赤いが）北加賀など。アカイケンド（赤いが）南加賀。（コ）

福井・全地域ケンドである。一部にケドがあるが、ちらほら見える程度で特殊なものと言えまい。（ソ）

京都・ケレドモは各地で、いろんな形をとる。京都市はじめ、京都府各地で広くケドの形が用いられる。特に、山城地方に多い。これに対し、南桑田・船井・北桑田・亀岡など、いわゆる丹波地方及び南山城一部では、ケンドの形が使用され、奥丹波・丹後地方ではケエド形の使用がめだつ。丹後でも、奥丹後では、かえて、ケド形が多く、加佐郡・舞鶴市及び与謝郡の一部、すなわち口丹後にケエド形が多いこと、口丹後と直接交渉の少なかった旧愛宕郡地方（山城北部）や相楽郡地方にケンド形が認められることなど京都府内におけるその分布状態は単純でないがケンド・ケエドが、ケドの古形であることは認められよう。（ソ）

大阪・ケンドとなる場合もあるが、普通にはケドをつかう。条件

法にガを使うことは殆どなく、その場合にはケド・ノニを用いる。

ドリロクシタヤアカンカッタ——逆接。運動モ、スルケド勉強モスル——単純接続。(ソ)

三重・全地域でケドとなる。(ソ)

滋賀・ケド・ケンドをつかう。受験シタンヤケド(ケンド)落第

シタンヤ。(ソ)

奈良・全般にわたり、ケドとなるが、南部ではケンドの形を用いることがある。(ソ)

兵庫・くずれてケドとなり、全県下で、イキタイケンド(行きた

いけれど)と発音形で特徴的だ。(ソ)

兵庫・「が」「と」ころが」はあまり使わない、ケド・ケンドで間にあわせる。(ソ)

高知・アシモ、シツチューケンド、ユワレン(僕も知ってはいるが言うわけにはいかない)、ケンドはケンドモガともなる。(コ)

高知・ケンド・ケンダーがあり、幡多郡で稀にケンラーがある。

映画見タイケンダーヤメチヨコ。旧夜須村。(ト)

〔コト〕

兵庫・ノニ・モノノで、ノニニ・モンノのように発音形になる。

(ソ)

〔のて〕〔から〕

福井・サカイである。音声のうえでは、サケ、サケエなどがあるが、サカイの訛音にすぎぬ。(ソ)

福井・「のて」はアとなる。全地域におよぶ。アのときは、冷エ

ルデ、とともに、ヒエツデと促音化する傾向がある。形容詞(敵

い)——スイサカイ、スイアの分布とともに、スーアが見られ(敦

賀市)、スーテと清音化しているところもある(敦賀市常見)、しか

し、この分布は広くない。(ソ)

京都・福井・サカイは京都・梅井の各地に広く分布するが、越前

大野郡東部・大野市の一部ではガが用いられサカイ系は用いられな

い。ハササ サカイ

アは、丹後、奥丹後、越前、若狭等各地でも用いられるが、その

場合はサカイとアとの並用である。これは、山城、口丹波地方で、

サカイとシとが並用されるのと対応する。若狭、近江でもシ・アが

認められる。一般的に、シとアとは地域的対立をなす場合が多い

が、シ・ア共に存する所もあり、サカイ・シ・アが複雑な並立関係

を示す場合がある。(コ)

京都・福井・大阪弁的ヨツテニは、山城中央部や、近江の東海道

沿線地域に或る程度認められる。(コ)

京都・福井・「シ」サカイより頤説的接続機能が弱くおとなしい感じの語で、サカイ対シの対立関係は共通語のカラ対ノデの関係にやや似ている。(三)

京都・「から」に当る助詞は「サカイ」と「ヨッテ」である。今行クサカイ・待ッテテヤ、ジキイクヨッテ・待ッテテヤ。サカイはハカイ・ハケ・サケと転じた形を使う事が多い。また「ので」に当るのは「モノヤサカイ」の転じたモンヤサカイを使う。またその場合サカイが略される事もある。知ラナンダモンヤサカイ来ナンダ。サカイと同じ意味でシを使う事がある。今行クシ・待ッテテヤ。大阪で終助詞として使うシは、この助詞から転じたものかも知れない。例えば次の例など大分接近している。アゲルワ、ウチ持ッテルシ（上げよ。私持っているから）。(キ)

京都・頤接をデで表わす。頭ガイテヤア。休モウヤ。奥丹後地方に多く、山城、口丹波には少ない。丹波でも、天田郡・何鹿郡あたりでは用いられるようであるが、とにかく、頤接助詞シとデとは地域的対立関係がみられそうである。偶然であろうか。(ソ)

京都・頤接をあらわすシがある。寒イシ・火タコオ。山城・丹波地方に或程度用いられているが、特に、京都市あたりで、おとなしい感じの語としてよく用いられる。奥丹波ではその使用が少なく丹後では殆ど用いられない。(ソ)

京都・大阪弁的なヨッテニの使用は、京都府でもかなり認められ、八幡・御牧地方の他、山城地方に相当広がっているようである。若い人、女性に多い現象であるが、要するに、このヨッテニは、京都府内におけるいろんな大阪弁的要素の中でも勢力の大きいものといえよう。(ソ)

京都・京都府内あまねくサカイ系の助詞が行なわれているが、これには、いろんな音変化が認められる。京都市を中心に山城、丹波地方でサケとなる傾向が強く、京都市・丹波でハカイ・ハケになる傾向がみとめられるが、前者の傾向性よりは弱く、南山城等ではあまり認められない。乙種アクセントの奥丹後では連母音融合によりサキヤア(サキヤ)または(サキヤ)となる。熊野郡西部には、シキヤアという形もあり、但馬言葉との関係を考えさせるが但馬言葉的なスキヤアという形は認められない。山城・丹波地方ではサカイニ、サケニ、ハケニ等、ニのついた形と、ニのつかない形とが並存しているが、前者が大阪弁的傾向だとか、後者の方が新しい傾向だとかいうことは簡単には断定できないようである。(ソ)

大阪・古くは「サカイニ」「サカイデ」と言った。それから「ニ・デ」を省いたのが、「サカイ」である。この助詞の発祥地は京であろうが、西沢一鳳も「大坂のそふじやさかひは京のそじゃけん」とだと言っている程であるから、幕末以降の「サカイ」を大阪をもつ

てその代表地としてよい。「大阪さかいに京とすえ……」の俚謔もある。「サカイニ」の方は今日なお「サカイ」を強調する時に聞くが、「サカイデ」の方は全く減じてしまった。(オ)

大阪・サカイ(ニ)、ヨツテ(ニ)は全く勢力伯仲して用いられる。この両者には、男女、老幼、地域あるいは、原因、理由の主観性、客観性の上から何らの区別も見られず、両者全く同じ機能に用いられる。ノンデは前二者にくらべ理由、原因のさし方がそれ程強くない。場合によっては、ンデが接続詞的あるいは発語的用法に用いられることもある。ンデ・ドドノツマリガイチモンナシヤ(で、とどのつまりが無一文だ)。(ソ)

三重・理由を表わす助詞は極めて多形である。モンヤサカイデニ(四日市)、サカエ、モンデ、ンデ、(伊賀)、サカイ、モンデ、ヨツテ、デ(南三重)、サカ(南牟婁)、近畿式と東日本式とがまざっていろいろしく、四日市の用例など総動員の形だ。(ソ)

滋賀・サカイ(ニ)、ハカイ(ニ)、ヨツテ(ニ)、ヨオ勉強シタサカイ(ニ) 満点ヤッタ。冬ハ寒イヨツテ(ニ)カナワンワ。高島郡などは、サケ(ニ)、ハケ(ニ)となる。(ソ)

和歌山・サカ・サカイ(全県)、チョット、チカスギルサカ、見ヌクイノトチガウカ(ちょっと近すぎるから見にくいのとちがうか) 英山村。(ソ)

兵庫・サカイ(ニ)系が絶対に優勢である。但馬では、アメフルサケアア(雨が降るから)、ハケアア、ハケエ、スケアア、スケエ、シケエ、ケエとなる。サカイ系で、サカイニと、ニがつかない点は京都風である。ニのかわりにデをつけて、スケエデという傾向が強いのは丹後と共通する。南部では、サカイ(ニ)、ハカイ(ニ)、サケ(ニ)、ハケ(ニ)、サケン、ハケンと多い。そのうえ、ヨツテ(ニ)や、アメフルモン、ヨオイカン(雨が降るので得行かぬ)のモンヤ、アメフルン、デのンデも淡路にあり、他地区にもありそうだ。各地区に、アメフルシヨオ行カンのシも、この中に入れてもよからう。サカイニ系、ヨツテ系、モノ・ノデ系、シ系の四類があることになる。

高知・ニという。サイサイクルニコマル(度々来るので困る)、頭が痛イガニヨワツチョウト、助詞「ガ」につく。(ト)

高知・キニがある。ユーキニイカナ(言うからいけないのだよ)、幡多郡ではキニがケニ(ソ)となる。(コ)

高知・キ、キニ、キー、ケニ、ケンがある。カジヨ、ヒータキニ、頭ガイトーテオレン(風邪をひいたから頭が痛くてたまらない)、今日ワ風ガアルキン行クナ。(室戸町、旧槇山村)。幡多郡はケン、安芸郡、香美郡はキンが多い。(ト)

〔ト〕(ト)

高知・播多・渭南地方で、テがチと發音される傾向にあるが、中村市や大方町でテがシマウに先行するとき省略されることがある。

字オ書イ○シマウ。ソーナッ○シマウ。負ケ○シマウ。(ト)

〔ながら〕

大阪・動作の並行をあらわすモツテがある。歩キモツテ本読ム。

「ながら」には逆接機能があるがモツテには、これに対応する機能はない。この場合、クセニが、ほぼこれに当る。知ッテルクセニ教エヘン。(ン)

三重・伊賀・伊勢でもモツテ、傘姿では紀州と同じモチになる。

(ン)

兵庫・ナガラと使う以外に、飲ミモツテ話ショオのようにモツテで現わすことは、揺唇にもあるが、淡路が本場で、紀州風である。食ッタリ、飯ンダリのタリも使っている。散歩ガテラ(のついでに、かたがた)、子供ダテラ(のくせに)などがある。(ン)

香川・徳島・モツテを使う。nakimotte hanasio suru (コ)

〔のか〕

三重・「誰かが持つて行ったのか、見当たらない」の「のか」をカシテと南傘姿で使う。これはもつと広い範囲で使うのではなかる

うか。津市でも使うというから。(ン)

兵庫・ノンカと挽音形になるほか、ダレソキタカシテ(誰が来たのか)とカシテを使うのは淡路の特徴、紀州と共通である。(ン)

副助詞

〔は〕

大阪・はつきりワの形で表現面に出てくる場合は少ない。表現面に出ても上接母音との融合が目立つ、むき出しのままのワが用いられるのは特にその事物を区別してとり出す意識の強い場合である。

(ン)

大阪・コレ・ソレ・アレと綴着。コラ腐ッテル(これは)、ソラソヤワ(そりゃそうよ)(ニ)

三重・名詞の語尾と融合する。「は」は表現されないことが多い。(ン)

奈良・名詞と融合して、カサー(傘は)、ソラー(それは)、オラー(俺は)と南北共通だが、北部では「は」を表現しないことが多い。南部では、アヤヤの形をとりつつ、明瞭に表現する傾向がみられる。ツェア(杖は) 洞川、バスヤ、キタコ(バスは来たか) 上北山村(ソ)

兵庫・「は」は表現されないこともあるが、播州では融合して、コラ（これは）、ソラ、アラとなるが、淡路では、アミヤ（雨は）のようになること、格助詞も同様である。但馬でも、イクナア（行くのは）、イケニヤア（池には）、シツチャア（知っては）のように融合する。（ソ）

高知・融合変化することが多い。（全県）ソータ、シラザッタ（そうとは知らなかった）、イマリヤ、ナツヨヨ（今は夏さ）、アシンクノ、イナシンダ（私の家の犬は死んだ）（ト）

〔も〕

高知・疑問語の下にモが接して否定をあらわす場合に次のようになる。（全県）、何もいらぬ↓ナンチャーイラン。誰もできぬ↓ダレツチャーデキン。（ト）

〔こそ〕

京都・福井・仮定条件法としてコサレを使う。親ナラコサレ。強<sup>ハ</sup>コサレ。丹波・近江・若狭の各一部。

三重・「親なればこそ」の「こそ」は、伊賀で、オヤナラコサリ、オヤナラコサレ。他地区ではコソである。（ソ）

滋賀・甲賀郡には伊賀にもある係結がある。親ナラコサレ（親な

らこそ）、ソレコサレ（そのことだよ）（ソ）

奈良・北部盆地地方で、親ナリヤコサレ心配سنネヤ。但し、この例一例ぐらいのものだ。（ソ）

兵庫・但馬で、言ウデコソアレ、カワイガリコソスレ、のように使い、赤穂でも、頭コンヨケレ、親ナラコソレ、と使う係り結びの名残りである。淡路では、オマエコサイカニヤ（お前こそ行かねば）と使う。（ソ）

徳島・homokoso-sure nande warukuci ju : mougka 三好郡三好町屋間

〔さえ〕

高知・幡多郡でサヤ、サヨがある。コノコサヤ、ヨースルニ、オンシャーデキンカ（この子さえするのに、お前はできないのか）大方町、中村市下田、（ト）

〔でも〕

京都・福井・子供<sup>ヲ</sup>知ッテル。（コ）  
京都・ワテカテ知ッテル。これは、叱ラレタカテカマヘンの如き接続助詞カテと通ずるものであり、その使用地域もほぼ同じである。（ソ）

大阪・添加の「も」の機能にほぼ対応するカテがある。接続助詞のカテとは別のものである。呼ンダカテ来エヘン。用言十カテ——接続助詞。ワタイカテ行キマス、体言十カテ——副助詞。さらに、このカテが軽いものをあげて、他を推測させる「でも」と同じ用法に立つ。ソソナコト子供カテ（子供でも）知ツテルワ。（ソ）

兵庫・子供カテ知ツトルのようにカテを用い、カトテとなることもある。コレサエアレバ、ナンデモヤルのような用法は変わりがない。「だって」は、子供ヤテともなるが勢力はあまり強くない。淡路ではヤッテと使う。（ソ）

高知・ヂヤ（一）チ（全県）がある。ダレヂヤチ、シツチニューレバーノコタ（誰でも知っている。それぐらいのことは）。幡多郡では、中村でも、清水でも、大方でも、ヂヤチでなく、ヂヤチである。（ト）

高知・ンバレがある。コレワダレンバレニユワレン（これは誰にでも言ってはならない）。旧豊永村。誰・何時・何処などの疑問語に接続する。（ト）

高知・「にでも」の意のマーリがある。ドコマーリ、アルモンカ（どこにでもあるわけがない）（コ）

〔しか〕

富山・石川・一ツハンカ（しか）、金沢。一ツハッチャ（しか）白峰。（コ）

福井・シカ・ホカのほかにハカも相当広く行なわれている。（ソ）京都・福井・アンタ<sup>タ</sup>居ラヘン（限定）、ウチ<sup>タ</sup>アンタノ方が偉イ。比較の場合にまで用いられる。格助詞、副助詞等の分類が問題（コ）

大阪・「よりほか」の意でヨカ、ホカがある。ソレヨカ、コレガエー（よいか）格助詞。三枚ヨリナイ（よりほか）副助詞、一人ホカ居エヘン（よりほか）副助詞。（ソ）

大阪・ウドンヨカ売ッテヘン。シカ、ホカ、ヨリホカ、ダケシカ、ダケヨカとも。（コ）

三重・「たった一本しかない」の「しか」は、ハッチャ（伊賀）、シカ・コソ（南島町）、ヤッテ・ヤカテ・ハカ（南伊勢）、他地区はホカ・シカ（ソ）

奈良・シカ・ダケシカ・ダケヨカ・ホカ・ホチャ・ハッチャ・ハカ。ホカ系は主に北部、シカ系も用いる。シカ系は南部。（ソ）

和歌山・「一本しかない」イッポホカナイ・ハカナイ・ホチャナイ・ハチャナイ。元来否定的強調をするシカが比較に使われるので、それと入れ替りのように「……の方が」のホカがすわっているのはおもしろい。（ソ）



兵庫・コレヨカナイのように、ヨカ、ハガと播州で使い、淡路ではそのうえにハカ・ハチャも使う。一本ハチャナイのようになるので伊賀と共通である。但馬ではシキヤア・ホカを使う。赤穂ではこのヨカと、コレヨカ（これの方がよい）の比較のヨカとが混同されて両方ともシカを使う。(ソ)

愛媛・コレハカナイ。(コ)

高知・ホカチャ・カチャがある（全県）、アチャーオマンホカチャシラン（私はあなたしか知らない）(ト)

〔ばかり〕

福井・バカが普通。(ソ)

京都・福井・バツカリ（限定）(コ)

京都・京都府各地で広くバツカリとなる。バツカシという形も、京都市及びその近くの若い人々に用いられるが、（これは副詞のヤハリ→ヤツパリ→ヤツバシと同様の傾向であり、バツカシの使用範囲とヤツバシのそれとは同じである）。共通語のバカリは、二時間バカリ休ンダの如き用法をもつが、京都語ではそのような場合、バカリを用いず、ホドを使用する。(ソ)

大阪・程度をあらわす時はホド、限定をあらわす場合は、主としてバツカリ（シ）を用いる。サト、ヒヤクメホド、オクナハレ（砂

糖を百匁ばかり下さい）程度。ジブンノコトバツカリ（シ）カンガエトル（自分のことばかりを考えておる）限定。(ソ)

三重・「雨ばかり降っている」の「ばかり」は、京阪風のバツカリはあまり使わず、バツカが一般的だが志摩の先島ではバカとなる。(ソ)

滋賀・バツカとなる。阿呆ナコトバツカ言ウテナ。(ソ)

奈良・バツカリ、バツカシである。(ソ)

兵庫・但馬でバツカリ・バツカシと使い、播州でも、チトバカシだが、赤穂では、チットベエと使う。淡路でも、ケンカバアシトルと使うが、これは、おなじバカリでも意味が違って「動作の連続」の場合で、「数量の限定」の場合ではない。(ソ)

高知・バー・ビヤ・バツカシ。コレビヤークレタ（これぐらいくれた）旧豊永村。バツカリ・バツカシ・バーは全県。幡東方面で、「これぐらい」が、コレバー。昭和村で、コレッバーがある。県下で「いくらぐらい」「ドレバーバーとなる。(ト)

〔だけ〕

兵庫・但馬では、ミルダケとダケを使うが、ダツケ、ダツキ、ダキともなる。他地区ではダケである。行ツタキリ船ランのキリは変わりないが、「十円ぎり持っている」の用法はない。(ソ)

愛媛・有リシ(有るだけ)持ッテ。(コ)

高知・ダケのほか、ダキが希に使用される。コレダキ、アレダキ(全県)(ト)

〔くらい(ぐらい)〕

京都・福井・副助詞クライの終助詞的用法として、明ルイクライ

(とても明るい)がある。(コ)

兵庫・ドレグライと濁音形が多い。淡路ではソソナコト知ツトル

クライ(そんなことぐらい知ッているよ)の使い方をする。津名郡には、アルクライ(なくてたまるものか)の用法もある。岩

屋では、クライホドとも使う。(ソ)

愛媛・明日シナ雨ゾイ。(コ)

愛媛・ソソナコトヤケ出来イデ。(コ)

〔など〕

大阪・切手ヤミナ集メル。ナンカはより軽視。空箱ナンカホッテ

マエ(捨てちまえ)(コ)

兵庫・但馬では、ナド・ナンド・ナソ・ナンソと関東風を使う。

播磨、淡路は、ワイラニワ、ワカラン(私などには分からない)、  
寒イナンテ言エタ義理ヤナイ、と、ラ、ナンテを使う。ワイヤラ知

ラン(私など知らない。とヤラを使うこともある。アイツヤカシ知  
ルモンカ(あいつなど知るものか)とヤカシをも使うが、ヤナイ  
カ、ヤカ、ヤナイケ、ヤケ、ナイカラとも使うことがある。これは  
ヤカイという形で大阪にもあり、淡路では四国風のヤコシヤカを  
使う。「何や彼や」の意のナンヤカイ、ナンヤカシ、および「や何か」  
のヤナニカと関係があるのだろうか。(ソ)

高知・ラーを用いる。今頃、ポフアラ(がぼちゃなど)アルモン  
カ。(ト)

高知・「なんか」の意で、カタケを使う。アンナヒトカダケヤッ  
チ、イクモンカ(あんな人なんか、やっても駄目だ)(コ)

〔なりと〕

三重・「どこへなり勝手に行け」の「なり」は全地区で、ナト。

南三重で、ナットとなる。(ソ)

兵庫・ドコエナト行ケ、とナトを使う。ナットと促音で強化する  
こともある。(ソ)

〔やら〕疑問。〔誰〕か

京都・福井・誰ヤラソオ言ウタ(誰かがそお言った)、誰ソ知ラ  
ソカ。(コ)

大阪・「疑問詞十カ」の意でソを用いる。雖ソ来たら良エ。ドコソ街ヲ食ベルワ。(コ)

大阪・「疑問詞十だか」の意で、ヤを用いる。サッキ誰ヤ来タ。イツヤ知ランネン(コ)

三重・「誰か」「どこか」の「か」は京阪同様、ソと使うことが多い。(ソ)

滋賀・ドコゾニ、ナンソウマイ事ナイカ。(ソ)

兵庫・ダイソ来タンカ(誰か来たのか)、ナンソナイカ(何かないか)と、ソを使うのは南部だけらしい。これは、ドと訛るし、淡路では、ダツザ来ルダロ(誰か来るだろう)が、ダツリヤ、ダイジヤともなる。エエノヤラ、ワルイノヤラ、ワカラン(よいのか悪いのか分らない)のヤラもある。カは使わないようだ。(ソ)

〔すつ〕

三重・「ひとつずつ」の「ずつ」は、ソツ(津・南伊勢)。ソツ(志摩)。ツ(南伊勢・牟婁)。一般には、ズツである。(ソ)

高知・ツク、ツカがある。(全県)。三ツツトリ(三つずつ取りなさい)、五人ツカハシリニュー(五人ずつ走っているよ)。(ト)

〔ト〕

兵庫・「入れ物ごと」。但馬では、イレモンゴメニ、ゴットニ、ゴシ、トメエ、ナリと多形である。高砂では近畿的に、イレモンゴ。淡路では、イレモンゴシで紀州と共通する。(ソ)

愛媛・入レ物ゴミ置イトク。(コ)

高知・ゴシを使う。ゴトそのものは使用しない(全県)。入レ物ゴシヤオ(入れ物ごとあげよう)。(ト)

「はじめに」に記したように方言語彙集は多いが、全国方言の助詞・助動詞を見渡すものが少なく、「特徴ある助詞」について記したのも、その特徴ある助詞が、どの範囲まで広がって用いられているのかは知り難く、次々と出る最近の方言書から助詞を全国的な広がりで見たいと思つてこれを書いた。もっと多くの方言書から、もっとくわしく記さねばならないが、ここに手はじめとして試みたのである。次々と補つていきたく思つている。